

Title	<Book Review>Edited by Julia Meszaros and Johannes Zachhuber, "Sacrifice and Modern Thought", Oxford University Press, 2013.
Author(s)	門脇, 伸
Citation	年報人間科学. 38 p.63-p.67
Issue Date	2017-03-31
oaire:version	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/60461
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

〈書評〉

Edited by Julia Meszaros and Johannes Zachhuber

Sacrifice and Modern Thought

Oxford University Press, 2013

門脇 伸

1. 文献の紹介

今回取り上げるのは、Edited by Julia Meszaros and Johannes Zachhuber, *Sacrifice and Modern Thought*, 2013, Oxford University Press(以下、『供犠と現代思想』と表記する)である。『供犠と現代思想』は、供犠に関する15本の論文で構成された論文集であり、序文においては2008年、2009年のイベントからこの論文集の共同制作が始まったと述べられている。その2008年、2009年のイベントは、*Sacrifice and Modern Thought*と題された一連の講義・談話¹⁾のことを指していると思われる。なお、その一連の講義・談話を主催したのは、オックスフォード大学のFaculty of Theology and Religionにおいて設立されたCentre for Theology & Modern European Thoughtという組織であり、その組織は、神学と他の知的領域との関係に関する学際的な研究を推進することを目標としている²⁾。

また、編者のJulia MeszarosとJohannes Zachhuberに関しては、Meszarosは神学的文化人類学について研究する研究員であり、Zachhuberは歴史的・体系的な神学に関する博士である。なお、Zachhuberに関しては、Centre for Theology & Modern European Thoughtの運営委員会の名簿に名を連ねている³⁾。

2. 文献の内容

先述の通り、『供犠と現代思想』は15本の論文で構成されている。この文献を概観するために、各論文の内容を要約する。

2.1. Introduction

15本の論文のうち、最初に登場するのが編者のMeszarosとZachhuberによって書かれたIntroductionと題される論文である。この論文では、近代西洋における供犠論の扱われ方と供犠論を支える三つの要素について説明される。16世紀以来、供犠の意味を解き明かし、その本質を定義づけようとする試みは絶え間なく続いており、供犠は近代西洋において執拗に議論の中心となる題材であった。供犠論が活発になり始めた16世紀の西洋において、宗教革命、古代悲劇の再発見、大航海時代における他文化との邂逅といった出来事が生じ、この三つの出来事が、近代西洋における供犠論の推進力となった以下に述べる三つの議論の生成に深く影響している。まず、宗教革命に起因するのは、ユダヤ教やキリスト教との関わりの中

で生じた供犠の本質や正当性に関する議論である。次に、古代悲劇の再発見に起因するのは、ギリシャ悲劇における人身供犠の文学的表現に関する議論である。そして、大航海時代における他文化との邂逅に起因するのは、異なる文化において発見された様々な供犠の分類と類似点の探求に関する議論である。

このように、様々な議論に沿う形で、様々な立場から供犠論が論じられており、『供犠と現代思想』においても以下に続くような様々な論文が集められている。そして、『供犠と現代思想』に収録された論文は供犠や現代思想と供犠の関係性に関する体系的で一貫したひとつの物語を提示しようとしているわけではなく、各論文の筆者が現代における供犠の概念を形成してきた議論に関して必ずしも同じ立場をとるわけでもない。しかし、各論文は予期した点において、あるいは予期せぬ驚くべき点において相互に関係しているのであり、そのことによって、供犠に関する様々な解釈が相互に交わり、互いに影響し合っていることの提示が『供犠と現代思想』において期待されている、と述べられる。

2.2. その他の諸論文

以下、収録されている他の14本の論文について簡潔に要約する。

編者のうちのひとりである Zachhuber の論文 *Modern Discourse on Sacrifice and its Theological Background* においては、現代の非宗教的な供犠の議論とキリスト教的神学の関係について述べられる。

宗教哲学を研究している Pamela Sue Anderson の論文 *Sacrifice as Self-destructive 'Love': Why Autonomy Should Still Matter to Feminists* においては、宗教的慣習の家父長制における自己犠牲的な「愛」を強制する規範について批判がなされる。

体系的な神学を研究している Paul S. Fiddes の論文 *Sacrifice, Atonement, and Renewal: Intersections between Girard, Kristeva, and Balthasar* においては、題名に登場する三人の思想家同士の関係性について研究されている。

もう一人の編者である Meszaros の論文 *Sacrifice and the Self* においては、自己の供犠に関しての考察が行われる。

体系的な神学を研究している Wolfgang Palaver の論文 *Sacrificial Cults as 'the Mysterious Centre of Every Religion': A Girardian Assessment of Aby Warburg's Theory of Religion* においては、ルネ・ジラルールという思想家の供犠論について言及される。

宗教研究を行っている Jessica Franzier の論文 *From Slaughtered Lambs to Dedicated Lives: Sacrifice as Value-Bestowal* においては、人間の自律的な意志の存在が重視されつつ、ジラルールの供犠論への批判がなされる。

ヒンドゥー教研究や比較宗教的研究を行っている Gavin Flood の論文 *Sacrifice as Refusal* においては、供犠を放棄として理解することでもたらされる影響について述べられる。

神性について研究している Philip McCosker の論文 *Sacrifice in Recent Roman Catholic Thought: From Paradox to Polarity, and Back Again?* においては、ローマンカトリックの慣習・理論・教会と供犠の関係について論じられる。

社会文化人類学者であるNick Allenの論文Using Hubert and Mauss to think about Sacrificeにおいては、アンリ・ユベールとマルセル・モースの供犠に関するテキストについて言及される。

文化人類学について研究しているLaura Rivalの論文The Aztec Sacrificial Complexにおいては、文化人類学的観点からアステカの人身供犠の解釈・分類が行われる。

神学・美学・文化について研究しているDavid Brownの論文Human Sacrifice and Two Imaginative Worlds, Aztec and Christian: Finding God in Evilにおいては、キリスト教神学の視点からアステカの人身供犠について論じられる。

宗教について研究しているBettina E. Schmidtの論文Blood Sacrifice as a Symbol of the Paradigmatic Other: The Debate about Ebó-Rituals in the Americasにおいては、アフリカ系アメリカ人の宗教に対してキリスト教的認識が与えてきた影響について述べられる。

キリスト教の歴史について研究しているJon Pahlの論文Apocalypse and Sacrifice in Modern Film: American Exceptionalism and a Scandinavian Alternativeにおいては、アメリカとスカンディナヴィアの映画における黙示録的思想と供犠の間の関連性について述べられる。

近代初期や英語に関して研究しているDerek Hughesの論文Human Sacrifice and the Literary Imaginationにおいては、ヨーロッパ文学における人身供犠について述べられる。

3. 供犠を扱う中で生じる理論の形成と変化

上記の論文に触れる中で、供犠には、属する文化・捧げられるもの・共同体において果たす役割・表現方法といった様々な要素の違いがあり、そのような供犠の性質に影響され、各論文も非常に個性豊かになっていることがわかる。そして、そのように供犠が多義的であるからこそ、供犠のどの側面に着目するかによって、供犠論同士での対立が生じ、その対立の結果、対立し合った供犠論同士が統一されることなく変質する可能性が生じる。

その例として、Jessica Franzierによる論文From Slaughtered Lambs to Dedicated Lives: Sacrifice as Value-Bestowalを取り上げる。この論文においてFranzierは、ルネ・ジラルルの供犠論は欲望の模倣性の概念に基づいていると指摘し、その模倣理論によれば、人間は模倣への欲望という見えない力で支配され、人間の自由意思が説明できなくなってしまうと主張し、ジラルルの欲望の模倣性の理論を批判する。

この論文においては、ルネ・ジラルル(1923～2015)の供犠論に対して批判が行われる。上記で要約した他の論文においてもかなりの頻度で登場するこの思想家が提示した理論のうち、この論文において重要なものは、以下の二つである⁴⁾。一つ目は、人間の欲望は他者の欲望を模倣することによって生じる、という模倣的欲望論である。二つ目は、暴力的な存在である人間が欲望を模倣し合う結果として生じうる共同体の危機的状況は共同体の成員のひとりをスケープゴートとして殺害・排除することで解消され、神話はそのおぞましい記憶を婉曲的にほのめかし、人間あるいは人間の代わりに動物を犠牲に捧げる供犠によってその恐ろしい出来事を再現することでカタルシスの効果により共同体の秩序を守る、というスケープゴート論である。

ジラルルの模倣に基づく供犠論に対し、Franzlerは、他者の欲望の模倣を人間の行動原理とみなすジラルルの理論によって人間が自発的に物事を選択する可能性が否定されるわけではないことを主張し、供犠には暴力的な活動を伴わない形式もあることを例示しつつ、ジラルルの供犠論における欲望の模倣性の理論が、自律的な意志の存在を否定するものたりえないことを示そうとしている。ここにおいて、自律的意識が存在するか否かという問題を軸にして、立場が異なる理論の形成と変化が同時に起きている点に私は注目している。

まず、暴力的な活動を伴わない供犠の例示についてだが、これは飲食物や装飾品を供える贈与的な供犠と何らかの経験を諦めることによる自己犠牲的な供犠が、暴力的な供犠を供犠の本来の形式として見なすジラルルの供犠論への反論として援用されている。

このような批判においては、ある種の供犠を取り扱うことにより自身の主張を合理化しようという意図が読み取れるように思える。特に、この論文の場合は、自発的意識を重視するが故にジラルルの模倣的欲望論への非常に強い反発を含んでいるように読めるため、ジラルルが重視する暴力的な供犠様式に対立する存在としての非暴力的供犠の援用に恣意性を感じてしまう。しかし、持論を展開する以上、持論を支える形で物事の解釈を行うことになり、程度の差はあるにしても、そのような解釈の結果として持論に沿うように対象を合理化してしまうことは避けられない。また、解釈の対象が多義的であればあるほど、なされる解釈のバリエーションも多種多様なものとなる。よって、供犠という多義的な事象を考察する場合、その事象の多義性ゆえに、様々な、そして時には互いに対立し合うような、理論が形成されることになる。

次に、人間の自発的な意志の存在がジラルルの欲望に関する理論によって否定されえないという主張についてだが、この主張は三つの指摘に基づいて行われる。一つ目は、他者の欲望を模倣しようとする欲望とは異なり他者に依存しない価値判断から生じる欲望が存在する、という指摘である。二つ目は、模倣的な欲望が選択される場面においても模倣する対象を選ぶ意志が認められる余地がある、という指摘である。三つ目は、模倣的な欲望の結果として生じた出来事が向かう矛先を選択することができる、という指摘である。

これらの指摘は、人間の行動を模倣の欲望で解釈しようとするジラルルの理論への反論としてなされているが、同時に、ジラルルの模倣的欲望論と人間の自発的意思の双方について再考する機会を提示している。人間の自発的意思を強調する主張と模倣的欲望論の対立は、模倣的欲望論における欲望の発生・作用に対する深い理解を要求し、同時に、自発的意志そのものが模倣的欲望論の産物である可能性の考察の必要性を提示する。そして、このような相互批判において、双方の理論が再考の余地を得ることにはなるが、この過程において相異なる立場の理論同士が統一されてひとつの理論へと回収されてしまうことはない。これは、異なる立場同士の間で生じた議論の対立を、理論同士を統一するのではなく、双方の議論を残しつつ再解釈する可能性が提示される場合の一例であり、Introductionにおいて編者たちが掲げていた目標が達成されている証しであるように思える。

上記に例示した通り、供犠という多義的な事象を扱うにあたり、ある問題を軸として理論を正当化する形で供犠の恣意的な解釈、及びに、異なり対立する理論同士における相互的な批判による変容が生じう

る。このように、多数の理論が形成され、形成された理論が統一されることがなく変化することが可能となったのは、供犠という事象が多様な理論を包括できるほど広い射程を持ち、同時に、物議を醸すような問題を多々抱えているからである。

例として取り上げた Franzier の論文においては、自律的な意志の存在が重要な位置を占めているが、他の論文の概要からも推測できる通り、供犠が包括する分野は、宗教・文化・歴史・思想・文芸・芸術といったように幅広く、それぞれの分野においても様々な立場が存在する。このように様々な分野・立場に開けていることにより、供犠を扱う中でまったく立場が異なる異質な議論同士が出合いという状況が整えられる。

そして、上記のような状況において異なる議論同士を引き寄せる働きをする物議を醸すような問題が供犠という事象においては多々見受けられる。自発的意思の有無、すなわち人間の理性の問題は近代西洋の思想にとって議論を避けては通れない問題であるし、なにより、人間や動物の死という、供犠のすべての側面を表すわけではないにしても、強力なインパクトを持つ問題の存在は大きいように思う。

このように、供犠という事象が多様な分野と問題を抱えていることで、供犠の考察において様々な理論が形成され、接触し、相互に影響し合うことができる。

4. おわりに

この論文集においては、多様な供犠が扱われ、多様な供犠論が展開されており、それぞれの供犠論が様々な形で安易に統一されることがなく影響し変化し合う様子を描いている、という点で Introduction において示された『供犠と現代思想』の目論見は達成されていることを確認した。

そして、供犠という事象の持つ広域な射程と多様な問題により、異質な理論同士が出合い、接触し、影響し合い、互いの存在を保ちながらも変化を重ね、連綿と続いてきた様々な議論の中からこれまでなかった新しい理論が生まれてくる場面に立ち会えるかもしれない、という点においてもこの論文集は非常に興味深いものになっているように思う。

注

1) University of Oxford, Sacrifice and Modern Thought,

<http://users.ox.ac.uk/cgi-bin/safeperl/ctmet/main.cgi?7>

(2016.11.25 確認)

2) University of Oxford, Centre for Theology & Modern European Thought,

<http://users.ox.ac.uk/cgi-bin/safeperl/ctmet/main.cgi>

(2016.11.25 確認)

3) University of Oxford, CTMET People,

<http://users.ox.ac.uk/cgi-bin/safeperl/ctmet/main.cgi?2>

(2016.11.25 確認)

4) ルネ・ジラルルの模倣的欲望論、スケープゴート論の理解においては、西永良成の『〈個人〉の行方——ルネ・ジラルと現代社会』(2002 年、大修館書店)を参考にした。